

## 姿勢の崩れに対する気づきが生まれ歩行の再獲得へつながった1症例

○足達 紅美<sup>1)</sup> 玉木 義規<sup>1)</sup> 日下部 洋平<sup>2)</sup> 本田 慎一郎<sup>3)</sup>

- 1) 甲南病院
- 2) 豊郷病院
- 3) (有) 青い鳥コミュニティー

### 【はじめに】

パーキンソン病（以下、PD）の姿勢異常は臨床上よく観察される特徴の1つである。今回、PD患者の姿勢の崩れに対する気づきを促す訓練が契機となり歩行の再獲得へ至った為、以下に報告する。

### 【症例】

70歳代女性PD患者（発症から14年経過、Hoehn&Yahr分類Ⅲ）。転倒による仙骨骨折により歩行が困難となり入院となった。受傷より1ヵ月経過し痛みは軽減したが、歩行は自立に至らず歩行器での生活が続いていた。立位姿勢は体幹前屈・右側屈で、荷重比は右30kg左10kgであったが、姿勢の崩れに対する認識はなかった。立位や歩行時は、「左足がふわふわする」と記述し、左前足部の触圧覚が4/10と著明に低下していた。

### 【病態仮説】

姿勢の崩れは、仙骨骨折による痛みも影響していると考えられるが、本質的な問題として「体幹側屈がみられるPD患者では、姿勢の異常は自分では感知できない（Yokochi, 2006）」ことにあると考えた。つまり、足がふわふわする（怖さ、不安）という記述は、左前足部の知覚の著明な低下と右側偏移の荷重経験の結果と推察されるが、長期間の中で緩徐に姿勢が崩れていったことに気づけなかったことが本質的な問題と考えた。

### 【訓練仮説と訓練】

歩行に必要な交互の重心移動が容易になるためには、まずは姿勢の崩れに気づきを促さなければならぬと考え、以下の過程を経た。①OTが患者の姿勢を「くの字」という言葉を使用し模倣して提示した。②その姿勢を視覚分析させて記述させた。③立位時左右の姿勢変化に伴い足底圧の変化が相関する点に注意を向けさせた。

### 【結果】

訓練開始から数日後、姿勢の崩れに気づき、脊柱の側屈の程度に著明な変化はなかったが、左下肢への荷重が出始め、「（ふわふわせず）左足でも支えられている感じがする」と記述が変化した。左前足部の表在感覚は8/10になり、立位の荷重比は左右均等になった。2週間後、T字杖歩行が安定し、3週間後独歩で自宅退院した。

### 【考察】

本例は「くの字」という言葉、そして視覚を介すことで姿勢の崩れに気づきが生まれ、更に体幹の空間情報と足底の接触情報の関係性の再構築の訓練によって、どのようにすれば左下肢に荷重をかけることができるかを学習したと考える。必ずしも姿勢に著明な変化は無くても、歩行へつながられることが示唆された。

### 【倫理的配慮（説明と同意）】

本発表に関して説明し書面で同意を得た。